

視力検査（ランドルト環検査）・屈折検査について



子どもの50人に1人が弱視の疑いがあると
言われていて、早期発見がとっても大事だよ！

子どもの視覚は生まれてから6～8歳くらいまでに発達し、5～6歳ごろには大人と同じ視力になると言われています。この時期になると、視力は0.5以上見えるようになってきます。しかし、遠視や乱視などの屈折異常や斜視などの目の異常の早期発見、早期治療が遅れると、視力の発達が止まって弱視となってしまうことがあります。

弱視は、5歳までに治療することで効果が高まり、ほとんどのお子さんに視力の改善を認めます。

そこで、草津市の3歳6か月児健診では、弱視等を早期に発見し適切な治療につなげるため、ランドルト環による視力検査とスポットビジョンスクリーナーという機器による屈折検査を併用し、精度を高めて実施しています。

ランドルト環による視力検査

- ・ご自宅での事前練習が必要です。別紙の説明書を読んでいただき、ランドルト環を切り抜いてお子さんと一緒に練習をしてからお越しください。
- ・健診会場では、片眼ずつ年齢相応の視力があるかを測定します。片目遮閉をした眼鏡をお子さんに装着し、ランドルト環をもって座ってもらいます。少し離れたところにいる健診スタッフが、ランドルト環の視標を大きいものから示し、まねっこしてもらいながら徐々に小さい視標に変えていき、0.5以上の視力があるかを確認します。

屈折検査

- ・スポットビジョンスクリーナーという検査機器で検査します。
- ・カメラのような形をした機器でお子さんの目を映して測定します。お子さんがレンズの光を見ている間（おおむね1～2分）で終了します。事前練習の必要はありませんが、検査に支障が生じますので、検査前にスマートフォン等の電子機器を見るのはやめましょう。

屈折検査の様子



～地域の眼科医からのメッセージ～

3歳6か月児健診でのスポットビジョンスクリーナーによる屈折検査、およびランドルト環による視力検査は、弱視（眼鏡をかけても視力が不十分）を発見するための大切な検査になります。

片目が見えていなくても傍からみれば正常に見えます。健診で発見して治療すれば治るものが、まれに治療時期を過ぎてから発見されるお子さんがいます。「なぜもう少し早く発見できなかったのか」と医師としてつらいものがあります。3歳6か月児健診をぜひ受診して、精密健康診査を勧められたときは必ず眼科を受診していただきたいと思います。

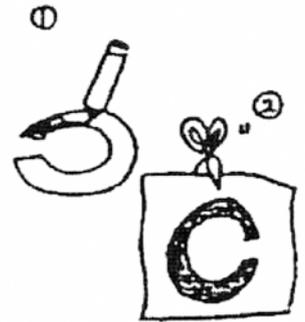
視力検査について お家で練習してからお越しください

<用意するもの> 画用紙、黒のマジック、はさみ

<作り方>

1. 画用紙に、下図のような環を書いて、黒のマジックで塗ります。
2. 黒く塗った部分をはさみで切りぬきます。同じ要領で2枚作ります。

※お子さん用には、車のハンドルの要領で持たせるため、段ボール紙などで少し厚めのものを作ってあげてください。



<練習の仕方>

1. おとなが車のハンドルを持つ要領で、お子さんにランドルト環の持ち方を教えてあげてください。
2. おとながランドルト環を見せて回しながら、お子さんが一緒に環を回せるように練習しましょう。
3. 環の切れ目が同じように合わせられるよう「これと一緒にしてごらん。まねっこしてね」と、遊び感覚でお子さんをリードしてあげてください。



この視力表は
ランドルト環
といます。